

山口省蔵が訊く

金融業界の課題を読み解く

熱い!! 金融対談

第42回 希望のまちをつくる

奥田知志、田崎辰夫 (ゲスト) × 山口省蔵 (聞き手)



本連載は、金融業界における課題をテーマに、「熱い金融マン協会」を主催する山口省蔵氏による識者との対談をお伝えするものである。

今回は、北九州市でホームレス支援に尽力されるNPO法人抱樸代表で牧師でもある奥田知志氏と、抱樸などのNPOに融資を行ってきた九州労働金庫の田崎辰夫氏とを迎えて、ろうきんによるNPOへの融資について鼎談を行った。

●ホームレス支援と労働者の構造変化

山口 奥田さんがホームレス支援を始められた経緯を教えてください。

奥田 困窮者問題に初めて関わったのは、大学1年生の時(1982年)でした。平凡なサラリーマン家庭で何不自由なく育ち関西学院大学に入った18歳の5月に、大阪の釜ヶ崎という寄せ場(日雇い労働者が集まる場所)に大学の先輩に連れて行かれました。そこでは、仕事に就

けなかった労働者の多くが野宿で暮らしており、市内の行路病死者が年間200人以上出ていました。なのに、新聞にも載らない。私は、日本は豊かで安全で平等な国だと思っていましたが、そのイメージが崩れました。大学院を卒業するまでの6年間の釜ヶ崎でのボランティア活動をしたことが出発点になりました。その後、福岡にある西南学院大学に進み、牧師になります。山口 北九州に来てからのホームレス支援活動は、どのように始まったのですか？

奥田 活動を始めたのは1988年12月です。北九州のキリスト教関係者が中心でした。5、6人で、おにぎりを握って、寝ている人たちのところへ持って行きました。その頃は、このような事業になるとは思っていませんでした。最初の年から12年後の2000年にNPOとして「北九州ホームレス支援機構」を設立しました。その時でさえ事務局的職員が1名で、あとはボランティアで運営していました。

NHKの「プロフェッショナル

ル」という番組に2回出演していますが、最初に出た2009年時点で私は無給のボランティアだったのでプロフェッショナルではありませんでした。収録の最後に「プロフェッショナルとは？」というトークがあります。そのとき「実は私、プロではありません」と言うと、「番組名がプロフェッショナルなので、プロじゃないと言ってはダメです」と言われました(笑)。NPO法人の理事長就任挨拶では、「1日も早い解散を目指し、今日から始める」と言いました。社会問題を扱うNPOが発展することは、社会が悪化しているということですから。我々は自分たちの存在を消すことを目的に活動を始めたのです。

山口 その後も、ホームレス支援の活動は広がっていったのですよね？

奥田 2008年に、リーマン・ショックでホームレスが急増した時、「これは単なる景気の問題ではない。社会構造が変わってしまった」と思いました。日本は、長期雇用慣行でどっしりとした中間層を作ってきた

た。これが戦後社会保障システムのベースにもなっています。生活保護で月に約11万円をもらえるのに、なぜ国民年金では6万8千円しかもらえないのか。生活保護は資産を持ってない人が対象ですが、年金は、受給者が退職時には住宅などの一定の資産を持っている前提で設計されています。この前提の崩壊が明確になったのが2008年の年越し派遣村です。あの段階で、若者を中心とした非正規雇用が4割に近づいていました。その人たちが65歳になっても、年金の前提である持ち家もなければ退職金もない。社会の中間層の底が抜けてしまつて、ホームレスと隣り合わせになってしまつていました。

それで2013年の活動開始25年のときに、「解散しない宣言」をして、それまでのホームレス支援といった問題解決型の名称を「抱樸」に変更しました。抱樸とは、荒木（樸）をそのままに抱きとめるという意味です。荒木にはとげがあるので抱いたものが傷つく、自らが傷ついても支援を必要とする人を抱

く、という意味も含みます。その頃、私は牧師の仕事の一部を引き継いでもらえる人をよび、抱樸の仕事に有給スタッフとして携わるようになりました。このあたりから困窮者支援とともに地域作りが本格化しました。**山口** 非正規雇用の拡大により、中間層だと思っていた人たちが奥田さんたちの支援の範囲に入ってきてしまった、ということですね。田崎さん、奥田さんの今の話を聞くと、正規雇用の労働組合のみを通じて金融サービスを提供しているだけでは、ろうきんが労働者の構造変化に対応していない、ということになりますね。

田崎 そのとおりです。私たちは、組合員を中心に事業を行ってきました。そこには、他金融機関のリテール戦略の波が押し寄せてきています。従来の労働者福祉の枠を超えて、社会福祉にまで視野を広げなければ、ろうきんの存在意義が失われま

す。そのようなNPO活動を行っている方へ私たちがから歩み寄ることが必要です。

●寄付の安定性

山口 抱樸の事業規模と財務基盤について教えてください。

奥田 抱樸は、地方のNPO法人としては所帯も大きく、パート従業員も含めれば120名ほどが働いています。2024年5月時点では、ボランティア登録者が2000名を超えています。このほか、北九州市内での活動には参加できないけれど毎月千円〜1万円を寄付してくる全国のマンスリーサポーターが1500名ほどです。

すべての事業を合わせると年間5〜6億円の規模になります。国や自治体などからの委託事業が半分、自主事業が半分です。自主事業の中には、介護事業や障害福祉事業などの採算性のある事業がある一方、子ども支援やホームレスの炊き出しなどの採算がとれないものがあります。採算がとれる事業でお金を確保して、不足する事業に回しています。それでも不足する分を賄っているのが全国からの

寄付になります。

山口 寄付はどの程度、NPOの財政を支えているのですか？

奥田 今では、収入全体の10%に当たる年間5千万円くらいの寄付が集まる団体になりました。最初の10年〜15年くらいは、「寄付はしてもらえればラッキー。来なかつたら仕方がない」という感じでした。

しかし、15年くらい前に、「予算書では寄付の収入は0としており、決算書では相当額が計上されるのはおかしい」と専務の森松に伝えました。「寄付を事業化すべきだ」と。我々の活動は社会創造であり、寄付は社会参加の第一歩です。寄付者は、単なる支援者ではなく「参加者」です。その後、寄付は予算化されました。「寄付してもらえないから」ではなく「寄付を予算に入れるのか」「寄付を見越して支出をした後に足りなくなつたらどうするのか」等、いろいろな議論を行った結果です。現在は、それを担当する部署もあります。

山口 私もNPO等に寄付をしています。毎月、定額をクレ



●ホームレス支援は「学生時代の一つの体験」から始まった奥田氏

には、コロナ禍で仕事と住まいを失った人を支援する支援付き住宅を目的に1億1千5百万円を集め、全国10のNPO団体に託し支援付き住宅を200室作りました。結果、日本ファンドレイジング大賞をいただきました。

●田崎さんと抱樸との出会い

山口 田崎さんと抱樸との出会いはいつですか？

田崎 2017年に九州労働金庫（以下、「九州ろうきん」という）に福祉金融推進室（現在の福祉金融推進課）が設立され、私が初代の室長でした。当然、抱樸の活動については知っていました。せっかく同じ九州にあるのだから、一度訪ねてみようと思ひ、2018年1月にお伺いしました。その後、抱樸が行う炊き出し（夜回り）の活動などにも参加しました。

山口 融資など、取引を行うつもりはあったのですか？

田崎 相談があれば、積極的に対応したいと思っていました。それから半年後に連絡がありました。

奥田 抱樸の事業の半分を占める自治体等からの委託事業では、実際の事業が先行して行われても、清算が年度末になることがあります。1年分の費用を先出ししなければなりません。その時も資金繰りの見通しが厳しかったので、理事会の議論の中で、「ろうきんに相談してみたら」と言いました。

山口 委託事業の発注元は、どちらですか？

奥田 国からの直接事業もありますが、北九州市や福岡県が多いです。

山口 最終的な支払いは確かな先ですね。

田崎 融資の相談があつた時に、事業別の収支をチェックしました。不採算部門も少しありますが、全体では収支は安定していることがわかりました。この相談が、最初の融資につながります。

●希望のまちプロジェクト

山口 九州ろうきんが1億円を超える融資を行った「希望のまち」とはどんなものですか？

奥田 子どもを含むすべての世代を対象とした地域共生社会のための福祉拠点を、特定危険指定暴力団工藤会の本部事務所跡地に作る、というプロジェクトです。

山口 このプロジェクトへの融資について、九州ろうきん側では、返済可能性をどう見込んでいたのですか？

田崎 抱樸の定常的な収入がどれくらいかを分析して融資しました。この定常的な収入の中には、年間での安定した寄付も含まれています。もともと、このプロジェクトでは多くの寄付が集まったので、実際には2年で返済されました。「そんなに早く返さなくてもいいのに」とは思いました（笑）。

奥田 2022～23年の2年間で、希望のまちの土地と建物の両方での寄付が3億1千万円集

ジットカードで引き落とす形式になっていきます。このようなサブスク型の寄付を実際にしていると、「よほどのことがない限りはやめないだろうな」と感じます。NPO側から見ると、安定したキャッシュフローが見込めるはずですよ。

奥田 そうなのです。最初の頃は、クレジットカードの引落としがわからない方用に金融機関の振替口座用紙を渡していました。マンスリーサポーターが始まったのはここ6～7年です。そういう時代になりました。

テーマによっては、クラウドファンディングで集中的に集めることもあります。2020年



●「社会的意義と事業体の健全性を見極め融資を行った」と田崎氏

のために、福祉のために使ってもらえたらよいと思う」と言っておられました。私はそのニュースを見て、北九州市に「持ち主を紹介してほしい」と伝えました。地域では「工藤会が再び戻って来るのではないか」「マンションが建って、そこに元

の暴力団関係者が入ってくることは避けたい」「ここで何か商売が行われても、それに対する嫌がらせが始まるのではないか」など不安がありました。北九州市のバックアップのもと、我々が新たな施設運営に取り組むのが一番良い、と考えました。私は土地所有者の社長と会う前に、NPOの役員会を開いて、どこまでの金額を出せるかを確認しました。1億2千万円が限度とされました。社長の家に伺い、その土地で行いたい事業について語ったところ、「それで奥田さん、いくらで買うの?」と聞かれました。「申し訳ないけど1億2千万円」と伝えたと

ころ、「それでは難しい」とのことでした。確かに、周辺の地価だけで考えれば数倍の価値があると思います。その日の交渉は不調に終わり、しょんぼりして帰りました。しかし翌朝、社長からお電話をいただきました。「奥田さんが置いて行った資料をすべて見ました。良いことをしていますね。もう一度話が見たい」と。結局、1億2千万5百万円で決まりました。九州

まりました。
山口 定常的な収入の見通しが融資判断の決め手になったのですか?
田崎 購入した土地は、利便性が良く実質価値が高く見込めました。その点もプラスに考えました。
山口 取得土地は、経済価値の高い場所だったのですね。しかし、暴力団の本部があつた土地をどうみるかによって評価は変わると思います。その点に関して、九州ろうきん内では、どのような議論がされたのですか?
田崎 おそらく私が北九州出身の人間ではないから、その点に鈍感だったことが良かったと思

います(笑)。北九州出身の職員からは「よくやりますね。大丈夫ですか?」と言われました。対応に悩みましたが、土地取得に至るまでに、福岡県暴力追放運動推進センター(以下、「暴追センター」という)が間に入っていたので、「問題ない」と考えました。
奥田 工藤会に対する税金の差押えがあつて、暴追センターが管理者になりました。その後、この土地を福岡の企業が購入します。この企業の社長が、匿名で顔も出せない状況で取材に答えておられる様子がニュースで流されていました。その中で「跡地をどうするか」と尋ねられると、その社長は、「街

の暴力団関係者が入ってくることは避けたい」「ここで何か商売が行われても、それに対する嫌がらせが始まるのではないか」など不安がありました。北九州市のバックアップのもと、我々が新たな施設運営に取り組むのが一番良い、と考えました。私は土地所有者の社長と会う前に、NPOの役員会を開いて、どこまでの金額を出せるかを確認しました。1億2千万円が限度とされました。社長の家に伺い、その土地で行いたい事業について語ったところ、「それで奥田さん、いくらで買うの?」と聞かれました。「申し訳ないけど1億2千万円」と伝えたと

ころ、「それでは難しい」とのことでした。確かに、周辺の地価だけで考えれば数倍の価値があると思います。その日の交渉は不調に終わり、しょんぼりして帰りました。しかし翌朝、社長からお電話をいただきました。「奥田さんが置いて行った資料をすべて見ました。良いことをしていますね。もう一度話が見たい」と。結局、1億2千万5百万円で決まりました。九州

「どうしてもここでやりたい」と言いました。周りほとても心配していましたが。」

●金融機関からの融資の意義

山口 想定以上の寄付が集まったのは、そのコンセプトへの共感の結果だと思えます。ろうきんから融資を得られたことには、どういった意味があったのでしょうか？

奥田 このプロジェクトの記者会見に、九州ろうきんに出てもうりました。ろうきん自体が暴力関係者から因縁をつけられるリスクも意識されたとは思いますが、田崎さんたちが勇気ある決断をしてくれました。これによって、一般の人からも、我々の取組みは、ちゃんとした金融機関が脇を固めている、とみてもらえます。我々のプロジェクトが社会的信用を得たということとです。だから、記者会見で、「ろうきんからお金を借りました」と話をさせていただきました。
山口 田崎さん、このプロジェクトへの融資審査は、すんなり

通ったのですか？ そもそも、ろうきんの中心となる住宅ローンの平均融資額は2〜3千万円ですよね。1億円を超えるNPO向けの融資で、いわくつきの土地取得案件であったならば、もめてしかるべきかと思いません。

田崎 最初に抱樸の森松専務から「暴力団本部跡地の土地を買いたいけど融資可能か？」と連絡をいただいた時、「やったー！」（信頼を得た）と思ったことは今でも忘れられません。思わず勢いで「融資しましょう」と勝手に返事しそうになったことも（笑）。すでに抱樸へは運営資金の融資を行っていたこともあり、抱樸の事業体に対する審査はクリアできていました。問題は、この案件に融資できるかどうかでした。私は、「これほど社会的な意義のある活動を行っているNPOであるからこそ融資すべきではないか」と強く主張しました。

●九州ろうきんにおけるNPO向け融資

山口 田崎さんがろうきんへ就職したのはなぜですか？

田崎 私は大分出身なので、1986年4月に大分県労働金庫へ就職しました。2001年10月に、大分県労働金庫は7つ（福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島）の金庫と合併して九州ろうきんとなりました。

山口 田崎さんがNPO支援に関わるようになったきっかけは何ですか？

田崎 2001年は別府支店に勤務していましたが、その時の上司が児童養護施設をプライベートで支援していました。上司から「おまえもどうだ」と誘われて行ったのがきっかけです。2007年から2012年の間、統括本部で経営企画と営業推進を担ったときに、NPO支援に個人的に関わるようになりました。

山口 NPO向けの融資への取組みは、いつ頃からですか？

田崎 2013〜2014年に大分県本部の業務推進課長だった時に、現在の「おおいち子ども支援ネット」のNPO起ち上げに関する相談がありました。

最初は、助成金から始まり、その後、融資相談がありました。当時九州ろうきんでは、NPOの創業資金融資は取扱いきませんでした。創業時ですから、3年分の決算書もありません。融資額は5百万円でしたが、異例案件ですので、金額いかににかかわらず本部協議となりました。私が本部へ行き、担当部署に対して説明を行いました。委託事業等で収入が見込めまされたので、「返済に問題はありません」と説明しました。担当部署からリスク管理の補強についての話がありましたので、理事の保証を追加し、融資を了承してもらいました。それ以降、おおいち子ども支援ネットに対しては、子ども支援施設の設備資金として約2億円の融資を行うことになりました。

●NPO向け融資の課題

山口 NPOへの融資で注意すべき点にはどのようなことがありますか？

田崎 子ども支援や就労支援等



●ろうきんとNPOによる労働者福祉を越えた社会福祉に取り組む、熱いが行われた

では、対象としている市場の需要と供給をチェックします。地区内で支援対象者の奪い合いになっていないか、ということですね。

山口 どうやってチェックするのですか？

田崎 市役所等に行けばわかります。どれだけの支援対象者がいて、同業者がどれだけいるかは調べるのが可能です。

山口 委託事業の発注元である市役所でマーケットの全容が一発でわかるんですね。事業者としてのポジションが簡単に確認できるとなれば、むしろ融資しやすいかもしれませんね。

田崎 それを前提に、資金繰りを確認しています。

山口 NPO向けの平均融資額はどれくらいですか？

田崎 1千万円前後です。

山口 住宅ローンの平均額よりも低いですね。ろうきんでは、通常の住宅ローンなら対応手順が確立している一方、事業者向けは異例案件ですよ。同じ金額では手間に見合わないと思うでしょうが、1件当たりの金額が低いとなれば、なおさらですね。

田崎 そのとおりだと思います。審査段階だけでなく、その後の債権管理も職員に苦手意識があります。

山口 職員の皆さんがやりにくい気持ちにはわかりませんが、どの金融機関でも同じですが、個人の評価を数字で考えられてしまうと、簡単に数字を稼げるものに見

がいつてしまいがちです。

田崎 そうなんです。だから、こうした案件が、百万円単位の少額で相談されたら、敬遠されがちです。費用対効果だけで見られたら無理です。現場には、「とりあえず断らずに、本部の私たちに電話をつなぐように」と伝えていきます。現段階では、広報的な効果、福祉金融機関としての実績を示せることを重視しています。NPO向けの融資に関し、相談件数の目標は持っています。目標額を立てたら方向性がブレてしまいます。今はむしろ案件の掘り起こしが重要だと思っています。

山口 私は、戦後、ほとんどの金融が産業向けを対象にしている、労働者への融資がビジネスにならなっていく人が誰もいなかった頃、金融排除されていた労働者向けに金融サービスを提供し始めたのがろうきんの原点だと思っています。その創業の精神に照らせば、日本の労働者の構造が変わってきたなかで、非正規雇用者の課題などに向き合うNPO向けの融資は、ろうきんが踏み込んでいくべき

フロンティアだと感じます。今後、そうした取組みが拡がることを願っています。

プロフィール
(ゲスト)

おくだ・ともし●認定NPO法人抱擁理事長/東八幡キリスト教会牧師。1990年西南学院大学大学院卒業後、同教会牧師として赴任。98年ホームレス支援活動を始め、2000年NPO法人北九州ホームレス支援機構を設立(14年より抱擁に名称変更)、理事長に就任。

たさき・たつお●九州労働金庫事業部長(対談当時)。1986年大分県労働金庫(現九州労働金庫)に入庫。営業畑で融資や渉外を中心に6店舗21年間経歴後、2007〜12年総合企画部や営業推進部に従事。13年大分県本部業務推進課長。17年総合企画部福祉金融推進室初代室長に就任し、現在に至る。

(聞き手)

やまぐち・しょうぞう●1987年日本銀行入行後、金融機関の調査・モニタリング部署を中心に担当し、金融高度化センター副センター長を経て、2018年株式会社金融経営研究所を設立。金融を通じた社会の発展を目的に「熱い金融マン協会」を運営。特定非営利活動法人金融1-T協会理事長。